

テモテへの手紙第一2章「秩序の中の福音宣教」

1A すべての人のための祈り 1-7

1B 王たちのため 1-2

2B 救い主なる神 3-7

1C すべての人の救い 3-4

2C 仲介者イエス 5-7

2A 教会における男女 8-15

1B 男の祈りの手 8

2B 女の静かな従い 9-15

1C 良い行いの着飾り 9-10

2C 静かな学び 11-12

3C 慎みによる救い 13-15

本文

テモテへの手紙第一 2 章を開いてください。私たちは、エペソの諸教会を監督しているテモテに対して、パウロが書いている第一の手紙を読んでいます。前回の 1 章で、パウロがテモテに対して、命令を与えました。「1:19 それは、あなたがあの預言によって、信仰と健全な良心を保ち、立派に戦い抜くためです。」と言いました。信仰と健全な良心を保って、信仰の戦いをあきらめることなく、戦い抜くことです。エペソの教会には、敵からの大きな攻撃がありました。違った教えをしている者たちがいて、議論を引き起こしていたのです。けれども、パウロは、神の恵みの福音を証しすること、それから、敬虔にかなう健全な教えを保つことが、自分たちがしなければいけないこと、主イエスからの命令であることを教えています。

牧会者としての切なる願いは、安全で平和な環境を教会で提供することです。安心して、恵みの福音を聞き、神のことばを聞いて学ぶことができるようにします。エペソの教会に、論議を引き起こすだけの違った教えが入って来て、それに対抗するためにテモテは腐心していましたが、もしそうした騒ぎが起これば、安心して主のみことばを聞き、御霊から聞くことが出来なくなってしまいます。愛されているという安心感があるなかで、子どもは成長するし、それは神の家族でも同じです。ですから、指導者として、教会の監督として気を付けるのは、秩序です。秩序があつてこそ、健全に育つことができます。2 章は、秩序をいかに保つかをパウロがテモテに教えている箇所です。

1A すべての人のための祈り 1-7

1B 王たちのため 1-2

¹ そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために、王たちと高い地位にあるすべての人

のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。

教会において、専念すべきことは「祈り」です。個人の生活でも祈ることはとても必要ですが、教会において、何かにつけ祈ることは、そこに主の御霊が私たちを導いてくださる余地を作ります。「何よりもまず勧めます」と言っていますね。祈ることが第一になっている教会は、幸せだということです。議論をして争っている時には、人の思いや考え、その正しさを追求しているのですが、祈っている時は、神ご自身の思いと考えが優先されます。そして人の義ではなく、神の義が優先します。だれかと意見が対立したり、または自分に怒りやいら立ちが出て来ても、共に祈ろうという時に、いかがでしょうか、主のご臨在の中で自分の思いを捨てられます。

そして、ここで大事なのは、「すべての人のために」祈りなさい、と言っていることです。自分に関わる人たちのために祈ることは、もちろんとても大事です。私たちが真っ先に祈るのは、自分自身の必要ですね。そして、家族のことをよく祈られると思います。そして教会の人たちのためにも、祈ることがあると思います。では、それよりも外にいる人々のために、祈られているでしょうか？ 私たちは、たとえ自分には直接関わらなくとも、すべての人のために祈ることが大事です。

新約聖書には、キリスト者が祭司の国民になったことを教えている箇所があります。「Ⅰペテ 2:9a しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。」神に対して私たちは祭司となっています。つまり、神のところに出て行って、この方に仕えて、神の臨在にあずかります。そして、祭司は聖所から出て行き、人々に祝福を祈ります。主から受けた恵みを分かち合います。その祭司たちが集まっているところに、神の国が地上にも広がっていきます。人々が、祭司たちを通して神を知ることになり、それで神を認めるようになるのです。人々は、そのことによって救い主である神を知り、キリストを信じることもあります。そうしなくとも、この人たちは自分たちに必要な人たちだと思ふようになります。

聖霊の働きが使徒たちを通してエルサレムで始まった時、周りの人々がどのように反応していたかを見てみましょう。「使 5:12-14 さて、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた。皆は心を一つにしてソロモンの回廊にいた。ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していた。そして、主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。」仲間には加わらなくとも、人々は教会の人々のことを尊敬していたのです。そして、その中から主を信じる人たちもどんどん起こされていました。

今、多くのしるしと不思議が人々に間で行われた、とありましたが、祈る者たちの間では、神の力が現れます。イエス様が、教会には天におけるものを地で解放する力が与えられていることを教えられました。「マタ 18:18-20 まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつながれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。まことに、も

う一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」

そしてパウロは、そのすべての人たちの中に、「王たちと高い地位にある」人たちのために祈りなさいと言っています。彼らが身近であるという人たちは、ごく少数でしょう。ローマ帝国に生きている人々にとって、皇帝を身近に感じていた人たちはものすごい限られた人々です。けれども、だれもが知っています。皇帝礼拝も盛んでしたから、キリスト者にとっては偶像礼拝をも連想するような人たちであります。しかも、ローマは圧政で知られていました。高い税金が課せられていましたし、反逆者に対しては十字架刑で臨みました。その人たちのために、祈れとパウロは言うのです。

しかし、その働きは重要です。多くの人たちは批判し、反発しますが、祈ることができるのはキリスト者だけです。日本では、国のことについて祈る働きをしている人がいます。天皇陛下です。天皇陛下のお言葉に、何度となく「祈ります」という言葉がでできます。それは神道において、祭司として、政治とは一定の距離を置いて、しかし国のことに関わることを祈りますと表現しています。であれば、なおさらのこと、まことの神、王の王、主の主である方の祭司とされた私たちは、王たちと高い地位にある人々のために、祈ろうではありませんか。

そして、パウロは、祈ることについて、「願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい」という言葉で、いろいろ表現しています。願うというのは、そのまま願うことです。そして、祈るというのは、単に願う以上に、神に頼る姿勢です。そして、執り成すのは、王の前に出て嘆願するというのが、元々の意味です。主の前に出て、その人たちに代わって嘆願します。そして、感謝を献げます。指導者たちのことを感謝できないという人は、よほど、考え方が甘やかされていますね。次の 2 節にあるように、世界には無秩序状態になっているところがたくさんあって、政府があることがいかに貴いことなのかを、あまりにも当たり前になって分からなくなっている、鈍くなっているからです。今の首相、閣僚の方々、地方自治体の首長など、感謝することはたくさんあります。

²それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。

ここが、パウロが地位の高い人々のために祈りなさいと命じている、理由です。敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活をするということが、教会にとって、とても大切なことだからです。もちろん、戦争や混乱の中で教会の果たせる役割はとて大きくになります。しかしそれでも、安定した政府があることは、その助ける働きを大いに守ってくれます。ウクライナは戦禍にありますが、それでも政府は微動だにしていません。だから、教会が、広範囲に福音宣教の働きや、援助活動ができています。秩序ある社会が守られているからこそ、敬虔に生きるという神からの召しを全うできます。また平安で落ち着いた生活というのは、仕事もしっかり行って収入を得て、教

会として人々に分け与えるほどの恵みを持っていることができるということです。

ローマ人への手紙 13 章は、このことをしっかりと教える箇所です。「13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」そして、悪に対して剣をもって制裁することが書かれています。権威が神ご自身から来ていることは、主イエスご自身が認めておられることでした。十字架刑の判決を出す総督ピラトに対して、「ヨハ 19:11 上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。」と言われました。そして、パウロだけでなくペテロも、使徒たちは権威を敬い、従うことを信者たちに教えています。

当時は、ユダヤ人たちがローマに対する反発が頂点に達してました。ついに 66 年に、独立を求めてユダヤ人たちは反乱を引き起こして、それを総督が鎮圧しました。エルサレムの神殿が 70 年に破壊されました。それに対して、キリスト者たちは主に従って、反乱に加わりませんでした。ですから、ローマ当局はキリスト者を迫害したのですが、彼らを徹底的に弾圧できなかったのです。良心的な、法を守る市民として、彼らは生きていたからです。このようにして、キリスト教会は、迫害を受けながらも増え広がっていきました。

2B 救い主なる神 3-7

そこでパウロは、この平和の中で、救い主である神が、救いの御業を行われる話をします。

1C すべての人の救い 3-4

³ そのような祈りは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることです。

良いことであり、喜ばれることだと言っています。どうしても悪を行っているにしか思えない指導者のために祈ることが、良いことなのか？と疑問を抱きますね。けれども、そうではないのだということです。良いことで、神に喜ばれることなのです。私たちは、政治に焦点を合わせると、どこかでそうした人の国を超えたところにある、神の国を忘れてしまいます。主は、迫害を加える国でさえも用いて、御国を前進させることさえあるのです。例えば中国の教会は、共産党政権があったからこそ、家の教会が広がっていたと言われていました。エジプトのファラオがいなければ、神の栄光はあのような形で現れなかったのと同じです。ですから、彼らのために祈るのは良いことです。

⁴ 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。

パウロは、すべての人のために祈りなさいと命じましたが、それは、救い主である神の心を示しているのです。すべての人を救いたいと願われています。ですから、私たちは神に対する祭司として、すべての人たちに偏見なしに、ただキリストの使者として付き合っていく必要があります。パウ

口は、ギリシア人にはギリシア人のように、ユダヤ人にはユダヤ人になったといっていますね。理由は、すべての人を救いたい神のしもべだからです。

それから、ここで大事なのは、すべての人を救われて、真理を知るようになることを望んでいるとあり、すべての人が必ずしも救われるわけではないことです。多くの人が召されているが、選ばれる人は少ないとも、イエス様は言われました。それから、予定論と呼ばれる神学において、極端なものには、神は選びを初めから定めておられるので、選ばれていない者たちは滅ぶことも予定していると教えます。これは、明らかに間違いです。ここで、はっきりとすべての人を救いたいと願われている、神のみこころが書かれています。

2C 仲介者イエス 5-7

⁵ 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。⁶ キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自分を与えてくださいました。これは、定められた時になされた証しです。

午前礼拝でこの部分を取り扱いました。いろいろ、神々と呼ばれるものがありますが、その神と呼ばれているものが、すべての人を救いたいと願っているのでしょうか？人も、神と呼ばれているものも、どんなに博愛的であっても、すべての人を救うとは考えていません。こんな者は関係がない、という、温情にも限界があります。しかし、神は、罪人のかしらさえも救いたいと願われているのです。だから、キリスト者を激しく迫害していたパウロを救い、後に信じる人々の先例にされたのです。人々は、唯一というから排他的で、他の価値観を否定するのだと言います。ならば、問い直したい。これだけ寛容で、恵みに満ちた神はいるのか？ということです。唯一の方です。

同じように、仲介者であるキリスト・イエスも唯一です。神であり人であるということによって、初めて、神と人との仲介を果たすことができます。神だからこそ、私たちのことをすべて知っておられます。そして人だからこそ、私たちの弱さをすべて知っておられます。神と人との間にある隔てを、完全に埋めることができるのです。そして、主は、罪に売り渡された私たちのために、代価であるいのちを支払って、私たちを買い戻してくださいました。

⁷ その証しのために、私は宣教者、使徒、そして、信仰と真理を異邦人に教える教師に任命されました。私は真実を言っていて、偽ってはいません。

パウロは、エペソにいる違った教えをしている律法主義者らが、パウロのことを攻撃しているのを意識して、ここで強く主張しているのだと思います。すべての人のために祈れ、すべての人を救いたいと願っている神は、自分を異邦人に信仰と真理を教える教師にも任命しているというものです。異邦人は、割礼を受けなければいけない、律法を守ってユダヤ教に改宗しなければ救われな

いとしていた教えに対して、そうではないと反論していたのがパウロです。

「宣教者、使徒、教師」という三つの務めを、パウロは自分に当てはめていますが、宣教者は、福音を宣べ伝える働きです。そして、使徒は、遣わされたという意味です。主イエス・キリストの権威によって遣わされていて、ちょうど日本にいても、アメリカを代表する人を大使と呼びますが、キリストによって遣わされた人です。そして、みことばを教える教師であります。

2A 教会における男女 8-15

そしてパウロは、今度は教会内における秩序を語っていきますが、ここは、今現代の考えとは大きく異なることを、パウロは書いています。パウロは、男のしなければいけないこと、そして女のしなければいけないこととして、男と女の務めが異なることを教えています。今の時代、男女にそれぞれの役割があるという、それは古臭い家父長制度だ、そういったことを言っているから女性への差別になるのだという風潮でいっぱいです。男にしか与えられていない役割を、女も平等に担うことができると思います。そして、さらに今は、男と女に分けること自体が差別であると思います。男として生まれても女になることができ、女として生まれても男になることができる、というものです。ですから、これから読むところは、相当の反発があるでしょう。けれども、私たちは、神のことばそのものが最高権威です。次のことばに、しっかりと従っていかないとはいけません。

1B 男の祈りの手 8

⁸ そういうわけで、私はこう願っています。男たちは怒ったり言い争ったりせずに、どこでも、きよい手を上げて祈りなさい。

すべての人のため、王たちや高い地位にいる人たちのために祈りなさい、と、パウロは先に命じました。教会は、このように祈りところでないといけないといこうことです。そこで、パウロは男たちが、その祈りの手を上げないといけないと勧めます。すべての人たちが、男も女も祈ることを、私たちは命じられていますが、公の集まりにおいて祈る時に立つ人は、基本的に男たちだということです。ここで大事なことは、あくまでも秩序の話をしています。これから見て行く箇所もそうですが、たくさん例外があります。女が立って、祈ることもあります。けれども、全体として、その教会のかたちとして、人々を導く人々は男であって、女ではないということです。そして、導く時に祈りをもって導いていくということです。

「怒ったり言い争ったりせずに」と言っていますね。これは、論議を吹っかけている者たちがいて、そのような男たちが良かったり、疑いをかけたり、言い争いをしているからです。男の弱さかもしれません。そうではなく、祈りなさいと言っています。きよい手、と言っていますが、怒るのではなく、柔和な心で祈りなさいということです。今、教会では手を組んで祈ることがありますが、聖書においては、手を上げて祈ることが多いです。「I 列王 8:22-23a ソロモンはイスラエルの全会衆の前で、

【主】の祭壇の前に立ち、天に向かって両手を伸べ広げて、こう言った。」教会では、牧師の祝祷の時に手を上げることがありますが、祈る時ですから、祝祷に限らず手を上げてよいですね。

そして、「どこでも」と言っています。ここ 8 節から 15 節までの箇所を、男女の区別があまりにもはっきりしているから、エペソにある教会における特殊な文化的背景があるからで、すべてのところに当てはまるのではないという意見があります。けれども、どこでも、と言っていますから、ここには普遍性があると思います。つまり、どの地域の教会においても、どの時代の教会においても、男たちが祈りによって礼拝を導いて行きなさいということです。このように、教会は全体のリーダーシップ、監督や執事を男に任されていることが、聖書が教えていることです。繰り返しますが、例外はたくさんあります。けれども、全体的には男に任されているということです。

聖書を創世記から、黙示録まで見てください。主が男を造られて、男から女が造られました。子の創造における順序から始まり、ノアがおり、そしてアブラハム、イサク、ヤコブがおり、そして、モーセが出て来て、ヨシュアです。モーセの時に姉ミリアムが出て来ていますが、彼女がイスラエルの家全体を治めることはありませんでした。モーセが治めました。そして、士師の時代も、ほとんど全員が男です。しかし、デボラがいますね。しかし、彼女はバラクが率いなければいけないことを言ったのに、バラクはデボラに丸投げするので、デボラが率いたのです。そして、ルツにおいては、彼女は大きな役目を担いましたが、ボアズが彼女とめとるといふ、男のリーダーシップです。そして、ダビデになり、ソロモン、そして王たちはすべて、男です。不法に女王を名乗った者がいましたが、除去されました。預言者たちの中には、フルダのような女預言者もいました。けれども基本、男たちでした。

新約聖書も同じです。バプテスマのヨハネから始まり、主ご自身も人として男性です。そして弟子たちはみな男たちです。主の十字架とよみがえりの証人として、神は女たちを用いられました。しかし、彼女たちは使徒たちに伝えて、それでイエス様は彼らの間に現れたのです。誤解していただきたくないのですが、女が用いられないとか、そういった話では全くありません。むしろ、主が女たちを用いられ、また、使徒たちの働きの中に、関わっている人々に女たちが数多く出てきます。ですから、女たちが用いられないとか、ましてや、神の前での価値の優劣を語っているではありません。あくまでも、権威と順序の話をしています。それを考えると、男たちが神の前で祈っている、全体の監督を務めているということです。

2B 女の静かな従い 9-15

1C 良い行いの着飾り 9-10

⁹ 同じように女たちも、つつましい身なりで、控えめに慎み深く身を飾り、はでな髪型や、金や真珠や高価な衣服ではなく、¹⁰ 神を敬うと言っている女たちにふさわしく、良い行いで自分を飾りなさい。

同じように、という言葉から始まっていますね。男たちの間には、言い争いをするという傾向があり、それが問題でした。男は祈る人こそが男らしいと言ったらいいでしょうか。敬虔さを身に着けることを教えています。同じように、女たちには、派手な髪形や、金や真珠の高価な衣服を求める傾向がありました。しかし、聖書が一貫して教えているのは、外見で判断するのではなく、心のうちで判断することを教えていることです。福音の真理は、隠れたところにあるところから始まります。ですから、そのような着飾ることに心を使うのではなく、もっと良い行いで自分を飾りなさいと勧めているのです。特に、当時のギリシアやローマの文化では、そのような服装が、男性を性的に魅惑するためにもありましたので、教会ではなおさらのこと慎ましい身なりでないといけないうのです。

こういったことを話しますと、逆に振り子が揺れることがよくあります。つまり、こうした服装はいけないうといつて、細かく規則を定めて、学校の校則みたいにしてしまうことです。そうすると、逆にそういった見た目をどうすべきか、という、内側のこと、良い行いのことをおろそかにしてしまいます。真意は、行き過ぎた着飾りであり、福音の真理から気を逸らすことを防ぐためにあります。

2C 静かな学び 11-12

¹¹ 女は、よく従う心をもって静かに学びなさい。

ここの「よく従う心をもって」という言葉は、軍隊で使う言葉であります。権威系統の話をしていいます。秩序について、私たちはしっかりと覚えていないといけません。それは、権威というのは一つしかないということです。リーダーを見て、「みなが聖なるはずなのに、どうしてあなただけが上に君臨しているのか？と思うかもしれません。」この言葉を言った人がいます、はい、コラたちです。アロンとモーセに盾突きました。みんなでいっしょに、やって行きましょうという人は、どこかで自分自身がかしらになりたがっているから、そう言っています。

私たちの信じている神は、権威系統の神です。三位一体の神の中で、御子は御父の権威に従っています。そして聖霊は、御父と御子の権威で遣わされています。その従うということをしているからこそ、三者は一人なのです。一致があり、そこに平和と秩序があるのです。では、御子は御父より劣っているのでしょうか？聖霊は、御子より劣っているのでしょうか？全くそうではありません。同等で全く同じ性質を持っています。そして、エペソ人への手紙では、キリストと教会の関係を、夫婦は示しているとして、妻が夫に従い、夫は妻を愛するということを教えています。

そして、「静かに学びなさい」ここで言っているのは、キリストが立てられた監督や長老に対して、盾突いて物申しているような状態です。大事なものは、原則をパウロが語っているのであり、全体的な指導について話しています。コリント第一 11 章には、女が祈りや預言をすることが言及されています(5節)。女が教えているところも出てきます。アキラとプリスキラは、アポロに、さらに正確に道を教えたことが書かれていますが、プリスキラがアポロに教えたことは明らかです(使徒 18:26)。

ですから、例外は数多くあります。ここでは、全体の秩序として男が基本的に指導的務めを担っていて、そこで女がその権威に逆らって、何かを教えたりすることを話しています。

その具体的な一面を、パウロは、若いやもめについて、次のように話しています。5章13節です、「そのうえ、怠けて、家々を歩き回ることを覚えます。ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいをして、話さなくてよいことまで話すのです。」このように、話さなくてよいことまで話していくような姿を、パウロは念頭に入れていると思われます。

¹² 私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。むしろ、静かにしていなさい。

次の章で、パウロが監督の職について話していきます。「3:2 ですから監督は、非難されるところがなく、一人の妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、礼儀正しく、よくもてなし、教える能力があり、」とあります。男が監督であることを前提にしており、男が、聖書の教えをもってしっかりと教会の監督をしていくことを教えています。ですから、女が教えたり、支配したりすることを許さない、としているのです。これまで話したように、女の人が預言したり祈ったり、また他のいろいろな奉仕や賜物を用いられるということはありません。そして、男がリーダーシップを取れない状況の時に、例外的にリーダーシップを取ることもあるでしょう。デボラのように、です。けれども、そうでない時に、女の人が教えて、全体を支配するようなことがあってはいけない、とパウロは命じています。

したがって、教会における牧会者は、女ではなく男がすべきものと私は考えます。教会を神は、今の時代、立てておられますが、それ以外の組織もありますね。政府とか会社とかで、この原則を当てはめる必要はありません。また、キリスト教の教会ではない組織でさえ、当てはめる必要はないでしょう。人道支援団体の代表が女性であったりします。けれども、聖書を教え、治める監督としては、男が行い、女の人ではないというのは、先ほど説明した通り、聖書全体で男がかしらとなっているのを鑑みますと、神の教えておられる原則ではないかと思います。現実には、女牧師という立場の人たちは多くいます。しかし、私は聖書的ではないと思いますし、カルバリーチャペルの群れでは、女の牧者は存在しません。男が監督になり、教える必要があると思うからです。でも、男のリーダーシップの中で、女の人が語ったり、奉仕をしたりすることはいくらでもあります。

3C 慎みによる救い 13-15

¹³ アダムが初めに造られ、それからエバが造られた からです。

ここは、とても大事な箇所です。ここ第一テモテ2章の後半の解釈は、今の時代、大きな議論になっています。文化的に特別なものであるとか、あるいは、奴隷制度は聖書にもあるが、それは今は認めないのだから、文明が進歩した今、男が教え、女は従いなさいという家父長制も過ぎ去ったのだ、と教えます。私は、その解釈は間違っていると思います。なぜなら、パウロが根拠として

いるのは、アダムを神が造られ、次にアダムからエバを造られたと、創造の順序を根拠としているからです。私たちがアダムの子孫であるかぎり、この権威系統は今も、どこでも変わりません。

¹⁴そして、アダムはだまされませんでした、女はだまされて過ちを犯したのです。

これは、女が蛇に誘われて、禁じられた実を取って食べて、それを女が男に渡して、男が食べました。女はだまされ、男は神から命じられたことを破り、罪を犯しました。エバも罪を犯したのですが、しかし、男がかしらとして、罪を犯したことを、聖書ははっきりと言っています。「ロマ 5:12 ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がった…」アダムが罪を犯したのです。これは、秩序によって、彼がかしらになっているからです。

男というのが女のかしらというのは、神ご自身にも言えるのです。神は霊であり、男でも女でもありません。しかし、その人称代名詞は「彼」であり、「彼女」ではないのです。神の定めたのは、男がリーダーシップを取るというものであり、教会はそれを体現するところです。そして、聖書では夫婦において、家庭においてもそれを体現するように命じられています。他の組織や制度には、教えていません。教会と家庭です。

もし、その秩序を乱してしまうと、サタンに惑わしが大きくなることも示唆されています。女の人が、主に言われていることを男の人よりもより敏感に、先に反応しているところが多いですね。例えば、サムソンの母は、父よりもずっと早く、サムソンの生まれることについて、御使いから啓示を受けていました。そして、女たちが十字架のキリストを見て、復活も目撃しています。霊的に男より敏感な部分があります。けれども、それが秩序を乱した形で、支配する形で現れると、悪い方で霊的になることが多いです。イゼベルがその典型です。そして、黙示録では、ティアティアラの教会が、同じ名でイゼベルという女預言者がいて、彼女が教会の指導者たちと淫行を働き、偶像礼拝をさせました。秩序が乱れたところでは、悪魔の惑わしが強くなるのです。

¹⁵女は、慎みをもって、信仰と愛と聖さにとどまるなら、子を産むことによって救われます。

ここは、表面的に読めば、出産をしない女は救われないということになります。もちろん、そんなことをパウロは教えていません。彼の他の手紙で完全に否定しています。

この「子を産む」というのは、14 節に「だまされた」ということにつながっています。つまり、エバはだまされました。しかし、それで女が劣っているのでは決してないということです。パウロはバランスを取っているのです。女が子を産むことによって、世は救われました。そうです、処女マリアが、聖霊によってイエスをみごもり、そしてその出産によって、世に救いをもたらしました。だまされた

のも女ですが、メシアを産み出す器となったのも女なのです。

そこからまた、子を産むということが、決して産む機械でも何でもなく、偉大な主から与えられた務めであることも示唆しています。ハンナを見てください。サムエルをしっかり育て上げました。教会だけでなく、家庭での務めは、大きな神に対する奉仕であり、優劣をつける必要は全くないということです。どちらも、主にあって尊い務めなのだということです。

ですから、女の人たちも、男の人たちと全く同じように、敬虔を求めて行くことがその生き方なのです。それは、その与えられた務めの中で、信仰と愛と聖さに留まっていることです。その慎みの中で、キリスト者の歩みを全うすることができるということです。

いかがでしょうか、教会にある秩序があって、それで初めて平安に過ごすことができます。求めるべきは、愛と信仰、そして聖さ。また、敬虔、つまり主を畏れかしこむ生活です。そこからぶれない、ずれないで生きることです。